

書評：「システムデザイン論」 泉 耕二著

評者：鬼鞍哲夫

ちょっと大きな本屋を覗けば、そこには夥しい数の理数系の専門書が置いてある。その内容の多くはソフト、ハードの解説、設計方法であり、それよりだいぶ数は少なくなるが品質管理、製造技術等に関する本も散見される。これらは、この著者がいう“如何に作るか?”、How to make、に入る領域と云えよう。

それでは“何を作るか?”は何処で、どうして学ぶのかという疑問も生ずる。しかし、これを授業で学ぶことはまず無い。この領域は学校という場よりは、企業内教育として行われ、その内容やテキスト類も社外秘として、なかなか外部には見えてこない性格の物である。そういう視点からも、本書は、著者の豊富な経験、実績を背景に、その領域に敢えて踏み込んだ快挙ともいうべき内容である。

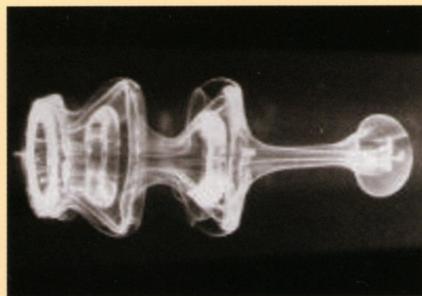
新しい商品の提案に際しては、社会的必然性の他に、その組織の持つ経営資産、競争環境、企業ビジョンとの整合性、など自分の立ち位置を理解しておく必要がある。そのうえで、当該分野での技術動向、顧客の動静など深く洞察した提言が求められる。つまり経営、マーケティング、技術をハイブリッドした考察となるわけで、これに耐えうる人材育成はなかなか難事である。本書の存在価値もそこにある。

評者は以前、海外企業で働いた際、ボードメンバーはアドミを除き全員がこのハイブリッドタイプで驚いた記憶がある。そのころ日本の会社では多くの“How to オジサン”が役員ゾーンを闊歩していたからである。企画力の彼我の差は明確であった。

本書は、学生を対象とするより、ある程度、経験を積んだ社会人にお薦めしたいと思う。システムデザインの高度化により、新たなライフスタイルを創出して、強い競争力を取り戻したいという著者の“想い”が感じられる書である。

システムデザイン論

—新たな life style の提案—



東京都立大学客員教授
泉 耕二



定価 1500 円(税込)